

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

第15回文化庁メディア芸術祭「アート部門」大賞受賞

山本良浩

◆大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了

僕が中学生から高校生だった1995(平成7)年前後、もっとも身近なアート作品といえば、ミュージックビデオやアニメーションでした。いまから思えばさまざまなタイプの映像メディアに接することができたのですが、絵画や写真のようにひとつの静止したイメージをつくりこむよりも、時間軸のなかで意味が発生する構築物を組みあげること、そのころから興味があったのだと思います。

武蔵野美術大学映像学科を卒業したあと、大阪の千里にある彩都IMI大学院スクール(現・IMI / グローバル映像大学)に通いました。IMIに入学したのは、実験映像の歴史を調べていくと、個人でつくることができる映像作品として、映画の世界よりも、現代美術の文脈のほうに可能性があると考えたからです。椿昇さんやヤノベケンジさん、やなぎみわさん、高嶺格さんが講師を務めていたので、空間上に作品を展開する、一線級のアーティストにふれてみることで、できるのが大きな魅力でした。

IMI在学中の2006年は、取手アートプロジェクトのゲスト・プロデューサーがヤノベケンジさんでした。そのおりに施設ごとに展示企画を募集するなかで、污水处理施設を使い、映像を用いたインスタレーションを発表することができたのです。水面に魚のイメージを投影し、それをダクトからのぞき込む「GOLD FISH」という作品で、昔はその施設で魚を飼い、毒がないか確認していたという地域の記憶や物語に寄りそった作品でした。その後、藝大の大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻に進み、IMIの設立者でもあり、メディア・アートから人類学にまで精通されている伊藤俊治先生の下で学びました。伊藤先生からは、テーマを作品化するときはどういう構造に落とし込んだらいいか、社会的なテーマを扱うときどういったことに気をつければいいか、歴史からピックアップしてこういう作家が参考になるといったことを具体的に教わりました。

文化庁メディア芸術祭アート部門で大賞をいただいた「Que voz feio (醜い声)」は、大学院の修士1年のときに制作した作品です。遠戚にあたる「出戻り移民」の双子の女性をモチーフに、空間上に2つの画面を使って映写することで生じる矛盾が、重要なテーマになっています。1つの画面だと没入できるにもかかわらず、画面が2つになることで経験が遮られ、批判的に見るシステムを生み出すことができます。またフルハイビジョンで撮ることによって、高解像度の利点から、室内にあるインテリアのディテールまで見えるのです。メディア芸術祭の大きなスクリーンで観たとき、双子の持ち物にフォーカスをあてたシーンなど、自分でもその効果に気づきました。人の記憶の不確かさや壊れやすさが、真実や虚構を超えたりリアリティをもつことを描きかかったのですが、意図したテーマと手法が伝わり、大賞を受賞することができたのではないかと思います。



「Que voz feio (醜い声)」2011年

やまもと・よしひろ

1981年千葉県生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。イメージ、音、文字、展示形式など、映像を「見る」という行為を異なる認識の多重体と捉え、短編映像作品とインスタレーションを制作。映像作品「Que voz feio (醜い声)」がイメージフォーラム・フェスティバル2011の「ジャパン・トゥモロー」(一般公募部門)にノミネート。同作品で2011年度第15回文化庁メディア芸術祭「アート部門」大賞を受賞した。



2011年第80回日本音楽コンクールバイオリン部門本選演奏風景 © 毎日新聞社

ふじえ・ふき

大阪府出身。4歳よりバイオリンを始める。2002年、第56回全日本学生音楽コンクール全国大会小学校の部第1位。2007年、第76回日本音楽コンクールバイオリン部門第3位。2010年、第19回ABC新人オーディション合格。2011年、第80回日本音楽コンクールバイオリン部門第1位。また、東京藝術大学にて、安宅賞を受賞。数多くのコンサートや音楽祭に出演。これまでに、東京交響楽団、京都市交響楽団などと共演。バイオリンを故工藤千博、清水高師、漆原啓子、漆原朝子の各氏に師事。現在、東京藝術大学4年在学中。



第80回日本音楽コンクールバイオリン部門第1位

藤江扶紀

◆音楽学部器楽科（バイオリン）4年

もともと母がピアノを弾いていて、父も音楽を聴くことが好きだったので、家にはクラシックの音源がたくさんありました。バイオリンは4歳のときに初めて手にしました。2人の姉のうち、すぐ上の姉がバイオリンを習いにいくというのでついていったら、私のほうがすぐに感覚をつかんだみたいなんです。

小学校2年生の時、元京都市交響楽団コンサートマスターの工藤千博先生の公開レッスンを受けることができたのです。工藤先生のレッスンはとても楽しく、充実していたので、バイオリンという楽器をそれまでよりもずっと好きになり、続けていくことにしました。私自身、演奏者としてまだまだなのですが、小さいころに埋めこまれた表現力というのは忘れないものだと思うのです。体も頭も柔軟な時期に身についたものは、その後に習得したものとは比べものにならない。工藤先生は、言葉でも手本でも表現がすばらしく、先生と出会えたことはほんとうに幸運でした。

藝大は練習環境に恵まれていますし、上野の杜も大好きです。いま学内では漆原朝子先生に、学外では漆原啓子先生に指導を仰いでいます。普通高校から藝大に入るので、高校までは音楽以外の仲間の考え方を吸収し、大学に入ってから演奏家の考え方を知ることができたのがとてもよかったと思います。

高校2年生のときにも日本音楽コンクール（2007年）の第3位になっているのですが、それ以来コンクールに出なかったのは、自分の出したい音を出すために、体の使い方を根本から変える挑戦をしていたからなのです。実は今回コンクールに出るのも、初めは周囲から反対を受けていました。なぜかというと、出るからにはやはり前回以上の成績を残すことが求められますが、その保証は全くもってないからです。でも、自分の成長を確かめたくて、最後は自分の判断で挑戦することに決めました。

今回のコンクールでは課題曲（バルトークの《無伴奏バイオリン・ソナタ》とシュー

ベルトの《ロンド》）が大変難しく、くじけそうにもなりました。結果的に進むことができた本選では、チャイコフスキーの《バイオリン協奏曲》を選んで演奏しました。これは前回3位になったときにも弾いた曲で、2009（平成21）年に亡くなられた工藤先生との思い出もあったからです。これまで演奏後に後悔することが多かったのですが、今回本選で弾き終えたあとは、ものすごい達成感と充実感でした。しかもオーソドックスや上品と評されることが多かったのに、初めて情熱的や野性的、本選に残った5人のなかでいちばん音量が出ていたよ、と言ってくださった方がいたのです。それがほんとうにうれしくて。

いまは藝大生活最後の1年を楽しみながら、海外留学を目指しているところです。藝祭では有志からなる「藝@orchestra」の中心メンバーとして活動してきたのですが、今年はマーラーの交響曲第5番を奏楽堂で演奏します。その準備で忙しいのですが、いまはそれがほんとうに楽しみです。

秋野 翔一

◆大学院映像研究科修士課程映画専攻(監督領域)修了

映画を意識したのは高校生のころで、すでにDVDやVHSで過去の作品を観られる時代でしたから、過去に遡ってさまざまな作品に接することができました。そんな中で、邦画では北野武監督や黒沢清監督の作品が印象的で、北野監督の映画『キッズ・リターン』(1996年)は、自分も映画を撮ってみたいと思うようになった作品のひとつです。

東京工芸大学芸術学部の映像学科に進み、3年生からは、脚本と映画理論のゼミである山川直人監督の映像表現研究室で学びました。山川先生からは、「ものづくりにはセオリーや文法があるから、つくるだけならだれでもできる。そのなかでも、絵や彫刻や音楽よりも、カメラで撮影する映画はとくにその傾向が強い。そのことをつねに考えていなければいけない」ということを学びました。東京工芸大学を卒業するにあたり、目標だった藝大大学院を受験しました。大学進学の間期間中の2004

(平成16)年に、藝大に大学院映像研究科が設置されることが発表され、北野監督、黒沢監督の教授就任が話題になっていたのです。

今回、カンヌ国際映画祭の「シネフォンダシオン部門」にノミネートされた『理容師』は藝大大学院の修了制作でつくった作品でした。シネフォンダシオン部門は、世界中の学生を対象にした、公募によるコンペティションで、今年は1700作のなかから15作品が本選にノミネートされました。日本から選ばれたのは8年ぶりとのことで、候補になったことは、周りの仲間のほうが喜んでくれたし、驚いてくれました。

大学院ではもともとファンだった黒沢清先生の下で勉強することができました。先生はあまり焦らず、生涯をかけて映画にかかわってほしいと僕たちにおっしゃいます。ゼミの雰囲気も、お茶をしながらのフランクで親密なもの。技術的なアドバイスではなく、頭ごなしになにかを言われることも

ないので、かえって大きな影響を受けたかもしれません。

『理容師』は、フィルムで撮影したこともこだわりのひとつ。デジタルとどちらがいいか言いきれないですが、教育的にはフィルムを学んでおいたほうがいいのではないのでしょうか。デジタルだと無制限にとることができますが、フィルムだとそうはいきません。予算もかかり、撮影時や作品の完成尺などもつねに時間の制約を受けます。そこで映画が、限られた時間と切り離すことができない芸術であることを改めて意識するのです。この作品では、ロケーションも室内だけで展開しました。フィルムを使うこともそうですし、自分に枷をつくりたかったのです。すべてが自由であるより、制約があったほうが自由は生きてくる。カンヌでの受賞はかないませんでした。制約のなかでつくる緊張感が作品に反映されたのではないかと思いますし、カンヌ映画祭への参加も含め、とてもよい経験でした。



『理容師』2011年

あきの・しょういち

1985年東京都生まれ。2009年東京工芸大学芸術学部映像学科卒業。同年東京藝術大学大学院映像研究科入学。11年同大学院修了。おもな監督作品に『ライムキャッチボール』、オムニバス映画『紙風船(第四話「紙風船」)』がある。今年、映像研究科修士課程映画専攻修了作品である『理容師』が第65回カンヌ国際映画祭「シネフォンダシオン部門」にノミネートされた。